

## 文学博士多賀秋五郎君の『中国宗譜の研究』に対する

## 授賞審査要旨

本書（上下二巻）は、序章、本文六章、ならびに「現存宗譜目録」とから成っている。中国社会史の中で、著者が「始祖一本の血縁統合体」と解している宗族の演じた役割は甚だ大きく、そこには他国にみられない著しい特色があるが、著者はこの宗族の間で作られた宗譜を取りあげて、日本・米国・中国に現存する宗譜を可能な限り広く調査・研究し、現在も宗譜が作られている実態を調査し、また各時代の関係史料を蒐集して、宗族の変遷と宗譜の変遷とを結びつけながら、詳細な考察を行っている。

著者はまず序章「中国宗譜の基本的概念と問題提起」において、宗族と宗譜、宗譜と家譜、通譜と支譜の関係、宗譜を作る目的とその内容、宗譜の編集と印刷について概説した上で、研究の課題を列挙している。そして第一章「宗譜成立の伏線としての古譜の研究」では、宗譜が宋の時代に士大夫階級の間から発生・成立する以前の、唐代までの貴族を中心とする古譜を扱い、官吏の任用に家柄が重視されていた魏・晋・南北朝の時代には、各宗族の家譜に国家の統制が加えられ、官撰の氏族譜が作られるようになり、その伝統が唐代にも続いていたことを述べ、また敦煌文書の中に見出される唐代の家譜・名族譜の残簡について説明している。

第二章「宗譜の成立と成長についての研究」で、著者は唐末・五代の社会的変革期に旧来の家譜の作成が衰退した

あと、新しく抬頭した士大夫階級のなかから宗譜が発生し、それが成長して行った経過を辿り、初期の段階では宗譜は五世以内の親屬を記載するという小宗法による考えがあったのに、それが次第に上限を決めない大宗法による記録として發展し、宗族結合を強化するための宗譜の役割りが重視されるようになり、譜を石に刻んで宗族が打ち揃って拝奠する儀式を行うものもあつたことを述べ、現存史料で知られる修譜の回数は、南宋では北宋の五倍以上、更に元代では南宋の四倍に達しており、譜に収載される族人の口数は南宋時代に五百人に達し、遅くも元代には宗譜の印刷が行われたことを指摘している。第三章「明代社会における宗譜の發達についての研究」は、庶民の経済的・文化的抬頭が目覚ましくなつた十五世紀から十七世紀にかけて、農商を業とする庶民の間でも宗譜が広く作られるようになった状況を考えたもので、著者は現存の明代の宗譜についてそれぞれの成立過程を辿り、普通の宗譜のほかに、本宗と支派、或は支派ごと、に保存されていた記録を集めた通譜ができ、また別に地方的に名族を記した名族譜が作られて、後者は特に新安地方において顯著であつたこと、明末・清初になると、不定安な社会情勢の中で宗族の結合を大きく作る必要から、異宗を蔽しく区別する慣行が乱れて、本来は別々であつた宗族の間で、共通の祖先を設けて通譜をこしらえる場合が少なくなつたこと、宗譜の様式が明末に一応完成して、(一)血縁の關係を明らかにする世系・世表・淵源記・支派記など、(二)宗族の榮譽を示す誥勅・像贊・登第記・仕官記・墓誌記・文苑など、(三)祖先の祭祀と族人の統制を強化するための墳塋記・祠堂記・祭文・祭産記・祠記、宗族の規範を明らかにする家訓・宗約など、を収録するようになったことを説明している。第四章「清代以後における宗譜の盛行についての研究」では、十七世紀から二十世紀初頭までの清代を通じて宗譜の作成が發展し、太平天国軍が攻撃・占拠した地域で一時衰退したものの、

やがて回復に向つて清末の光緒・宣統の時代は爛熟期ともいふべき時期であつたこと、辛亥革命以後にも修譜は存続していたものの、中華人民共和国の成立によつてそれに終止符が打たれたこと、を述べ、清代から民国初年にかけて作られた代表的な宗譜を抽出して分析し、修譜を推進すべき人材と財力、記載内容、印刷の種類などを考え、時代が降るにつれて一省あるいは数省にわたる多数の同姓宗族の通譜が作られる一方、宗族内の支派の勢力が伸張して、本宗の干渉を受けずに独自に修譜を行う傾向があつたことに注目し、また修譜が盛んであつた華中・華南の宗譜と華北のそれとを比較すると、後者は数が少ないばかりでなくて内容も単純であること、広東譜には福建譜や江西譜の影響、広西譜には広東譜、東北譜には華北譜の影響がみられること、などを述べている。

第五章「宗譜を通じてみた国法と族法との関係についての研究」は、宗族の要求する人間形成と国家の要求する人間形成との関係を、族塾と宣講という具体的な事象を通じて考察したもので、族塾については、宋代以来清末まで、宗族の教育機関として国家の干渉を受けずに運営されて、科挙及第を頂点とする教育体制の下部に位置づけられていたものが、清末に近代学制が公布・実施されてから以後に、変貌して行つた過程を辿り、宣講については、それがともと郷約実践集団ともいふべき約束の間で行われ、郷約が宣講されていたが、明代後期には明太祖の聖訓六言が取り入れられるようになったこと、明末には郷党間で行われていた宣講が宗族の間でも行われ、清代には世祖の六諭、聖祖の上諭十六條、世宗の聖諭廣訓などが取り入れられる一方、宗族が自らの立場から家訓や宗約の宣講を行い、国法と宗法との間に生じる摩擦はなるべくこれを避けながら、国法にはあつても都合の悪い項目を宣講に際して削除していたこと、宗族内の罰則は国法のそれとは異なつていて、宗族自ら祠堂においてこれを実施したことなどを論じて

いる。第六章「九龍における宗族修譜の研究」は、著者が九龍半島の農村地帯とその附近の島嶼で自ら行った実態調査の結果をまとめたもので、この地方では現在でも宗族が活動して修譜が行われているが、海岸線に沿って小宗族が点在し、水田地帯に大宗族が存在すること、宗族の団結が極めて強固で、囲壁を築き水濠をめぐらし、その中に同族が聚居して海賊の防衛に当たったこと、清朝の初期に遷界令が行われて沿海地帯の住民を奥地に強制的に遷居させた際に、宗族が大きな打撃を受けて宗譜も多く失われたこと、などを叙述している。

本書最後の部分に載せられている「現存宗譜目録」は、日・米・中三国の公機関に現存する宗譜を、国別に目録としたものである。著者はさきに『宗譜の研究・資料篇』（一九六〇年）を出版してその中に宗譜の目録を載せているが、今回の目録はこれを増補して配列を組み変えたもので、広く宗譜の利用者に大きな便益を与える。

従来も宗譜の記載を利用した中国史の研究は存在したが、宗譜そのものを全面的に取りあげて史料とし、各国に現存する宗譜を可能な限り網羅的に取扱った研究は、多賀君に始まるものである。本書は特殊用語の説明や史料の読み方になお補訂すべき点を残しているものの、中国社会史の研究に新しい領域を開いたと言わなければならない。